

# 秋祭りの記憶

文横沢彰

絵、みねふみつ



稲刈りがおおかた済むと、秋祭りは近づいてくる。

秋祭りは、おとなたちが神輿を担ぎ、地区内をねり歩く。神輿の前には、子どもたちが笛や太鼓を鳴らしたり、竹竿を担いで根本を道路にカタカタと音を立ててすべらせたりしながら歩く。

その行列の先頭を、お面をかぶり昔の装束を身にまとった二人が歩く。天狗の面のハナと、おかめの面のベタだ。御輿行列の行く先を安全にするための露払いが役目だ。本当は魔除けのための露払いなのだが、道のあちこちで子どもが遊んでいたりと、威嚇して追い払う。持っている竹竿を振り回し、地面をたたいて威嚇する。時には、逃げる子どもを追い回すこともある。子どもたちにとっては、昔から恐ろしい存在として伝えられてきている。

今年の秋祭りの役決めで、翔太はしょうたベタをやるように頼まれた。翔太はまだ小六だ。

地区役員の大人から、おかめの面を手渡された時は、ぎよつとした。なんで自分がそんな役をするのか。ベタやハナの役は、中学生か、もつと年上の人がやるはずなのだ。

「人手不足」と、役員のおじさんは即答した。

「この地区も、年寄りばかりになっちゃまった。中学生はもう神輿担ぎにも回つとる」

「けどなんで、ぼくがベタなん」

ハナは一つ年上のヨッチャンがやるのだという。それから中学生のヨッチャンがベタで、自分はハナであるべきだ。不満を顔に表した翔太に、地区役員のおじさんは、「ヨッチャンは中一だけんど、おとなしいしな……」